

文章読解・作成力の実態把握と能力育成へ向けた授業実践
—文章読解・作成能力検定の分析と考察をもとに—

野々村 憲

Actual Situation of Sentence Reading Comprehension and Writing Force and Lesson
Practice for Capacity Development

— Analysis and Discussion of Sentence Reading Comprehension, Ability to Create Test —

Ken Nonomura

I am thinking the development of basic literacy ability for graduation thesis from first-year university is an important. The basic literacy ability for graduation thesis is the sentence reading comprehension and writing force. Based on this idea I tried teaching practice for the basic literacy ability. In this report, I mentioned the actual grasp of basic literacy results and their analysis and discussion.

キーワード

文章読解力 Sentence Reading Comprehension, 文章作成力 Writing Force,
基礎的リテラシー能力 Basic Literacy Ability, 読書力 Reading Force

所属

広島文化学園大学 Hiroshima Bunka Gakuen University
学芸学部 Faculty of Arts and Sciences 子ども学科 Department of Childhood Studies

1. 緒言

広島文化学園大学学芸学部子ども学科では、アドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーという三つのポリシーのもとに教育を展開している。子ども学科のディプロマ・ポリシーは、卒業を認定し、学士の学位（子ども学）を授与する要件として以下の5点を設定している。

【子ども学科ディプロマ・ポリシー】

- ① 豊かな人間性と社会性を支える広い教養を修得している。
- ② 子ども学に関する専門力と、子ども支援、子育て支援に伴う実践力を有している。
- ③ 子ども学に関する専門知識を活用して、子どもを取り巻く幅広い問題を考察できる能力を修得している。
- ④ 問題解決能力、コミュニケーション能力等

の諸力を修得している。

- ⑤ 地域の教育文化の創造に関心を持ち、取り組む姿勢を有している。

ディプロマ・ポリシーの中でも特に③④の修得をめざしたカリキュラムとして大きな役割を担っているのは、3年次・4年次開講の「卒業研究Ⅰ」「卒業研究Ⅱ」であろう。

「卒業研究」では、学生の2年間の卒論指導を通して卒業論文を完成させ、論文審査会における教員審査により単位認定をしている。

近年、この卒業研究指導において学生間に論文作成のための基本的リテラシー能力（文献読解、文章作成能力、プレゼン能力等）に著しい能力差が生じているのを感じる。

特に問題視すべきなのは、基本的リテラシー能力が低いまま入学し、その能力を高めなまま3年次、4年次へと進級していく学生が増加傾向にあることである。このため、筆者の卒

論ゼミ指導を例にとれば、従来どおり実施している通り一遍の卒業研究指導では、学生への指導が徹底しないという現状がある。

このような状況をふまえ、筆者は大学入学後初年次から、卒論作成へ向けた基礎的リテラシー能力育成のための指導が重要であると考えている。

そこで、筆者は初年次開講科目『基礎ゼミナールⅠ』『基礎ゼミナールⅡ』において、基礎的リテラシー能力（読解力、文章作成能力）を高めるための授業実践を試みた。

次節は、その指導実践の報告ならびに、指導を通して把握した基礎的リテラシー能力の実態把握結果とその分析及び考察である。

2. 基礎的リテラシー能力を高めるための授業実践

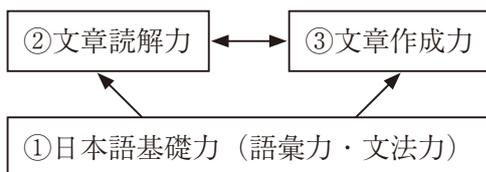
(1) 基礎的リテラシー能力の三つの柱

筆者は論文作成へ向けた基礎的リテラシー能力において、以下3点の能力を重要な柱と位置付けている。

- ①日本語基礎力
- ②文章読解力
- ③文章作成力

すなわち、文章読解及び作成をする上で必要となる日本語の語彙力、文法力が日本語基礎力であり、この日本語基礎力の土台の上に、正しく文章が読解できるという文章読解力、さらには思考を通して文章構成を考え、的確な文章が作成できるという文章作成力があると考えている。図1は、筆者の考える基礎的リテラシー能力の概念図である。

図1 基礎的リテラシー能力



(2) 基礎的リテラシー能力を高める授業実践

図1の概念図をもとに、基礎的リテラシー能力を高めるための指導のあり方を考えてみると、まず初めに日本語基礎力を定着させることが最も重要な指導事項であり、この日本語基礎

力を土台として、文章読解力、文章作成力を相互に関連させながら指導していくことが望ましいと考える。

このような指導方針のもとに、基礎的リテラシー能力を高める授業展開を立案し、平成25年度初年次開講科目『基礎ゼミナールⅠ』『基礎ゼミナールⅡ』（いわゆるゼミ）で実践した。

授業終了後、基礎的リテラシー能力がどの程度学生に定着したのかを客観的に測定するため、公的な検定試験である「文章読解・作成能力検定（文章検）」（*注1）を期末試験として活用した。

（*注1）文章読解・作成能力検定（文章検）

公益財団法人 日本漢字能力検定協会が平成25年度より開始した検定。同検定は、個人が文章読解、作成能力をどの程度身につけているかについて級別の認定を行うことを目的としている。検定を受検することで、その受検のための学習を通して能力を高めた上で、自分の能力を確認、証明できるシステムとなっている。

授業計画は、文章検の試験内容と対応させ、以下のような学習項目を立て授業を進めた。

〈『基礎ゼミナール』学習項目〉

- ①日本語基礎力の育成
 - ・語彙力育成演習
 - ・文法力育成演習
- ②文章読解力の育成
 - ・図表の読み取り演習
 - ・文章の読み取り演習
- ③手紙文の知識・作成のための演習
- ④意見文の作成のための演習

授業のテキストとして、「文章検公式テキスト4級」（公益財団法人 日本漢字能力検定協会）を使用し、授業はテキストにしたがい、演習形式で進行させた。

(3) 基礎的リテラシー能力の測定及び分析及び考察

授業終了後、期末試験として、文章読解・作成能力検定を実施し、その検定結果により授業評価をした。

検定実施にあたり、測定結果の効果等を考慮し、受検者の受検級は全員同一級とし、その受験級を4級（読む・書く活動を円滑に行い、基礎的な知的言語活動を行うために必要な文章読

解力及び文章作成力)に設定した。文章検は、授業受講学生28名を対象とし、平成25年2月8日に実施した。

文章検は200点満点による採点で、この200点満点に対して70%にあたる140点以上が合格となる。今回の検定結果は、本学受検者28名の内、合格者が24名、不合格者が4名、欠席者なし、合格率は85.7%という結果であった。

検定の設問は以下のような構成となっている。

【文章読解・作成能力検定の設問構成】

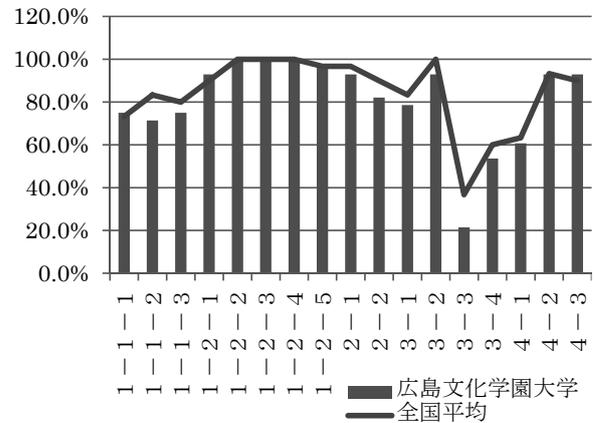
- [第1問] 語彙・文法 (択一問題) *配点40点
 - 語彙 問1-1 *5点
 - 問1-2 *5点
 - 問1-3 *5点
 - 文法 問2-1 *5点
 - 問2-2 *5点
 - 問2-3 *5点
 - 問2-4 *5点
 - 問2-5 *5点
- [第2問] 図表の読み取り (択一問題) *配点20点
 - 問1 *10点
 - 問2 *10点
- [第3問] 文章の読み取り (択一問題) *配点40点
 - 問1 *10点
 - 問2 *10点
 - 問3 *10点
 - 問4 *10点
- [第4問] 手紙文の知識 (択一問題) *配点15点
 - 問1 *5点
 - 問2 *5点
 - 問3 *5点
- [第4問] 手紙文の作成 (記述問題) *配点25点
- [第5問] 意見文の作成 (記述問題) *配点60点

以下、択一問題ならびに記述問題の検定結果について、分析及び考察を行った。

① 択一問題の測定結果とその分析及び考察
 グラフ1は、択一問題の各問題別正当率を全国受検者平均と比較したものである。グラフ横

軸は問題番号を示し、検定問題の第1問の問1-1であれば、1-1-1と表した。グラフ縦軸は正当率を%で示している。

グラフ1 検定結果 各問題別正当率



グラフ1のとおり、本学受検者平均正当率の傾向は全国受検者平均正答率と同様の傾向を示しているといえる。問題分野別の正当率を見れば、本大学及び全国受検者ともに、語彙の問題(1-1-1~1-1-3)と文章読み取りの問題(3-3, 3-4)ならびに手紙文の知識問題(4-1)が80%に届かず、低い数値となっている。特に正答率の数値が低いのは、文章読み取りの問題(3-3, 3-4)及び手紙文の知識(4-1)であり、60%以下となった。

以下の表1は、本学受検者28名を成績の上位者から順番に並べ、択一問題(第1問~第4問)について各自の正誤状況を一覧にしたものである。○は正答、×は誤答を示している。

本大学受検者が正答率において80%に届かなかった設問である、第1問 語彙の分野(1-1-1~1-1-3)、第3問 文章の読み取り分野(3-3, 3-4)ならびに手紙文の知識問題(4-1)については、網掛け表示で示した。

表1 網掛け部分の分布状況からは、誤答が成績の上位者や下位者に偏るという傾向は見られない。すなわち、網掛け部分は、受検者全般にわたって誤答が多いという結果である。

第3問の3-1, 3-2と比較し、3-3, 3-4の誤答が多いのは、設問内容によると思われる。

3-1, 3-2は文章の傍線部の意味を問う設問であるのに対し、3-3は傍線部の文が本文中でどのような役割を果たしているかを問う設問、3-4は所定段落の要約について問う設

表1 択一問題（第1問～第4問）正誤表

	第1問					第2問	第3問				第4問		
	問1			問2			1	2	3	4	1	2	3
	1	2	3	1	2								
1	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
2	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	○	○	○
3	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	×
4	○	×	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○
5	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	○	○	○
6	○	○	○	×	○	○	○	○	×	○	○	○	○
7	○	○	○	×	○	○	○	○	×	○	×	○	○
8	×	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○
9	○	×	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○
10	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	×	○	○
11	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○
12	○	○	×	○	○	○	○	×	×	×	×	○	○
13	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	×	○	○
14	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	×	○	○
15	○	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
16	○	×	×	○	○	○	○	○	×	○	×	○	○
17	○	○	×	○	○	○	○	○	×	○	×	×	○
18	○	×	○	○	○	○	○	○	×	○	×	×	○
19	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	×	×	○
20	×	○	○	○	○	○	○	○	×	○	×	○	○
21	×	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○
22	×	○	○	○	○	○	○	○	×	○	×	○	○
23	○	○	×	○	○	○	○	○	○	×	×	○	○
24	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×	○	×
25	×	○	○	○	○	○	○	○	×	○	×	×	○
26	○	×	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×	○
27	○	×	×	○	○	○	○	×	×	×	○	○	○
28	×	×	×	○	○	○	○	×	×	×	×	○	○

問である。すなわち、文章の読み取り問題ではあるが、設問難易度の高い3-3, 3-4は誤答が多くなったと考えられる。

第4問の4-2, 4-3と比較し, 4-1の誤答が多いのも, 設問内容によると考えられる。

4-2は表現を敬語に直すという設問, 4-3は末文を選択する設問であるのに対し, 4-1は時候のあいさつを問う設問である。手紙文における時候のあいさつは, 事前の学習による知識が求められるため, 誤答が多かったと考えられる。

表1の正誤状況を見ると, 本学受検者全般にわたって今後の学習課題となるのは, 語彙力ならびに文章読解力の育成であろうと考えられる。

② 記述問題の測定結果とその分析及び考察

表2は, 受検者28名を総得点における上位者から順番に並べた上で, 記述問題である第4問問4および第5問について, 得点結果を一覧にしたものである。各設問の配点は, それぞれ第

表2 記述問題（第4問 問4, 第5問）得点表

受検者	第4問 問4 25点満点	第5問 60点満点
1	20	60
2	25	60
3	25	55
4	25	55
5	25	60
6	20	55
7	20	55
8	20	50
9	20	50
10	20	50
11	15	45
12	25	55
13	20	40
14	15	45
15	20	35
16	20	45
17	20	55
18	25	50
19	20	45
20	20	40
21	15	40
22	15	40
23	0	50
24	0	50
25	0	55
26	5	40
27	15	30
28	15	40
平均	18.3	49.5

4問 問4が25点, 第5問が60点である。平均点は第4問 問4が18.3点, 第5問が49.5点であり, 平均に届かない得点は網掛け表示で示した。

表2網掛け部分の分布状況からは, 記述問題において平均点に届かない受験者が, 成績の中位から下位に偏るとい傾向が見られる。本学の記述問題得点状況は全国平均並みという結果であるが, 受検者による得点差が顕著であり, これは文章作成力における能力差が反映された結果であろうと推察できる。

表2の結果から, 文章作成力が育成されていない学生を, 今後どのように指導し, 能力を高めていくべきかということが, 今後の課題として見えてきた。

3. 読書力の育成へ向けた取り組み

基礎的リテラシー能力の測定及び分析及び考察を通して, 全般的に成績の悪かった日本語語彙力と文章読解力の育成が, 特に今後の学習課題

【図表7】読書時間推移

(分)

		04年	05年	06年	07年	08年	09年	10年	11年	12年	13年
男子	自宅生	31.4	30.4	36.8	33.3	34.0	30.9	37.9	35.6	35.8	31.5
	自宅外生	25.7	26.5	32.0	28.3	29.4	28.5	34.3	31.3	32.0	27.5
	合計	28.2	28.2	34.1	30.5	31.6	29.6	35.9	33.1	33.7	29.2
女子	自宅生	32.7	32.7	33.3	28.2	29.1	26.7	30.5	28.0	29.0	26.4
	自宅外生	30.4	28.7	28.3	22.2	22.8	22.6	26.0	23.4	25.9	22.1
	合計	31.6	30.7	30.9	25.2	26.1	24.6	28.2	25.6	27.5	24.3

*10年以降は電子書籍の読書時間を含む

として見えてきた。

筆者は、語彙力ならびに読解力を高めるためには、読書力の育成が必要不可欠であると考えている。読書力とは読書をする習慣を定着させ、毎日の読書を継続させる力である。この読書力を通して、語彙や表現力が豊かになり、読解力も高まると考えられる。

第49回全国大学生生活協同組合連合会による学生生活実態調査によれば、2013年大学生の1日の読書時間は平均26.9分（文系32.0分・理系24.2分・医歯薬系18.7分）で、同じ方法で調査している2004年以降最も短く、さらには、全く本を読まない学生は40.5%と、初めて4割を超えた。

2004年以降男子の平均読書時間は28分～35分の間を上下しているが、女子は2004年の31.6分から2013年の24.3分にまで緩やかに減少が続いている（図表7）。

【第49回学生生活実態調査の概要報告】

- ・調査実施時期 2013年10～11月
- ・対象 全国の国公立および私立大学の学部学生
- ・回収数 8,930（回収率28.8%）

この結果から見れば、全国的に大学生の読書力育成は喫緊の課題のように考えられる。

このような課題意識から、筆者は2014年よりゼミナールにおいて読書力育成への取り組みを開始した。

2014年度前期『基礎ゼミナールⅠ』では、読書力育成の一環として、課題図書を設定し、読書感想文を作成提出するという課題を課した。

ゼミ学生23名に対して、課題図書を6月に配布し、読書感想文提出締切日を8月初旬と設定した。課題図書は、実際に実物を読まなくてもインターネット等であらすじや解説等が検索できてしまうような図書を避けるという観点から、できるだけ最近出版された図書であるこ

と、さらには、短編よりも長編のほうが読解力の育成に有効であろうという観点から、以下の著書を課題図書として選定した。

【課題図書】

『虚ろな十字架』（東野圭吾）光文社

2014年5月25日初版

読書感想文作成に際しては、以下のような4項目の作成要領を提示した。

〈感想文作成要領〉

- （1）未提出者は授業の単位を認定しない。
- （2）所定感想文用紙で記述すること。
- （3）手書きで記述すること。
- （4）誤字・脱字は評価を減点する。

選定した図書や作成要領の効果もあり、ゼミ生23名全員が各自の創意工夫により、読み応えのある読書感想文を提出した。

この読書力育成へ向けた取り組みは、今後もさらに継続させ、発展していきたいと考えている。

参 考 文 献

- 1) 第49回学生生活実態調査の概要報告
(全国大学生生活協同組合連合会)
- 2) 『初年次教育でなぜ学生が成長するのか』
河合塾編著（東信堂）
- 3) 『大学教員のための授業方法とデザイン』
佐藤浩章編（玉川大学出版部）
- 4) 『虚ろな十字架』東野圭吾（光文社）